泣いたら赤鬼、陽はまた昇り」

赤鬼

青鬼／黒鬼

1、　はじまり

真っ暗闇。
声が聞こえる。声だけが、聞こえる。

赤鬼　ココロ　ノ　ヤサシイ　オニ　ノ　ウチデス

赤鬼　ドナタデモ　オイデクダサイ

赤鬼　オイシイ　オカシ　ガ　ゴザイマス

赤鬼　オチャ　モ　ワカシテ　ゴザイマス

2、幕が開く前の舞台で

暗闇に灯り。
赤鬼と青鬼の格好をしたふたりの男がいる。
赤鬼は　泣いた赤鬼」の絵本を真剣に眺めて。

赤鬼　元晴。どう思う？
青鬼　なにがどう？
赤鬼　赤鬼が作るお菓子。マドレーヌ？　クッキー？　ケーキ？
青鬼　……もっとカタイ系じゃないの。
赤鬼　カタイ系。
青鬼　鬼強いとか、鬼ムズい、とか言うじゃない？　鬼がつくんだから、柔らかい感じじゃないよね。
赤鬼　そうか。ラスクか……
青鬼　鬼硬くはないよね。サクサクしてるよね。
赤鬼　なら南部煎餅か。ダメだ、地域限定感がありすぎる。
青鬼　気になるの、そこ？
赤鬼　大事だろう、美味しいお菓子は大切な小道具。
青鬼　ねぇ。
赤鬼　うん？
青鬼　絶対トラ柄のパンツじゃなきゃいけないわけ？
赤鬼　鬼っつったらトラのパンツは良いパンツだろう。
青鬼　笑われるよ、この格好。
赤鬼　わかりやすいのがイイんだよ。
青鬼　なんで絶対このパーマ頭なの？
赤鬼　鬼だからだろう。ツノが一番生き生き出来る髪型はアフロなんだよ。
青鬼　じゃあじゃあさやっぱ体に色塗るよね。着ぐるみは予算ないから、塗る、当然だ、うん、塗るか。うん、やるよ。俺頑張るよ。西藤くん。
赤鬼　それはナシだな。
青鬼　え？
赤鬼　俺、皮膚が弱いんだよ。
青鬼　え？

赤鬼　皮膚呼吸できないと死んじゃうから。
青鬼　え。
赤鬼　ナシだ。
青鬼　自分に都合良すぎない？
赤鬼　肌がデリケートなんだよ。
青鬼　ねぇ。
赤鬼　何だよ。
青鬼　鬼のツノって成分、何？　骨？　軟骨？　コブ？
赤鬼　プラッチックだよ。これドンキで購入。
青鬼　違うよ。ホントの鬼のツノ。
赤鬼　え。
青鬼　え？
赤鬼　え。大丈夫か？　これ物語の、架空の、お話の、鬼だよ？
青鬼　大丈夫大丈夫、分かってる分かってる、そこまでバカじゃない。
赤鬼　ひろすけ童話だろ。
青鬼　うんうん、大丈夫。
赤鬼　俺、赤鬼、お前、青鬼。
青鬼　うんうん。
赤鬼　見ただけで分かりやすいだろう？
青鬼　うんうん。
赤鬼　こーゆーのお客さんにとってはめちゃんこ大事だから。
青鬼　うんうん、だけどだけどさ西藤くん。
赤鬼　なに。
青鬼　鬼って恐ろしいんだよね？
赤鬼　そう、恐ろしいもんだっつーその概念を覆したこの哀愁と愛らしさと、
青鬼　なにが恐ろしいの？
赤鬼　俺にザックリ聞くなよ。
青鬼　分かんないんだからザックリしか聞けないよね。
赤鬼　夏彦に聞け。
青鬼　だれそれ。
赤鬼　京極。
青鬼　読んだことないくせに。

赤鬼　読んだら夜寝れなくなるだろう。
青鬼　怖がりか。
赤鬼　悪いか。
青鬼　これ鬼じゃないといけないの？
赤鬼　ん？
青鬼　人間じゃダメなわけこれ。
赤鬼　泣いた赤鬼って題名だろ。
青鬼　人間と鬼ってそんなに違う？

赤鬼、青鬼を見た。

赤鬼　元晴、お前、やっぱ天才だわ。
青鬼　え、俺、バカだけど。
赤鬼　いんや、違うね。
青鬼　そんなこと言うの西藤くんだけだから。
赤鬼　いんだよ。分かんないやつはほっといて。
青鬼　分かりやすいのはお客さんにとってめちゃんこ大事なんだろ？
赤鬼　でもまず自分が面白くなきゃさ。
青鬼　ん？
赤鬼　やっぱお前と芝居するのが一番面白いわ。

赤鬼、手の中にある絵本を閉じた。

赤鬼　恐ろしくて愛らしくて強くて弱くて脆くていじらしくて意地汚くて貪欲で清らかで浅はかで慎重でマヌケでズルくてヌルくて賢いけれど野蛮で繊細で正直で嘘つきで楽しくて悲しい生き物、これなーんだ？

レッドツェッペリンでもいいけど。
音楽が流れる。
鬼のアフロを脱ぎ去って、トラのパンツを脱ぎ去って、
人間の皮をかぶるように、ふたりの鬼は人間の服を切る。

3、シューティングセンター

大きな音。

戦闘機が飛んだ。

椅子がふたつ並ぶ。
そこへ黒鬼が座る。
ハンバーガーとポテトとコーラ。
股に挟んで固定して、器用に食べる。
食べながら、コントローラーを手にする。
ゲームの音。
飛行機の音。
爆撃音。
黒鬼は当たり前のように。
赤鬼は少し、疲れた顔で椅子を見る。

黒鬼　え、なに？

赤鬼　……え？
黒鬼　お前、なに？　調子悪い？
赤鬼　あ……え、ああ、まぁ、いえ、
黒鬼　え、なに、どっち？
赤鬼　ちょっと、悪いです。
黒鬼　っしゃ、ヒット。

グレイト。
と、画面から機械の声。
赤鬼、その画面を見て嘔吐しそうな口を両手で抑える。
黒鬼、そんな赤鬼を見て、少し笑う。
気の毒そうに。
あるいは、小馬鹿にしたように。

黒鬼　なに。気分わりぃならもう帰ったら？
赤鬼　いえ、大丈夫です。
黒鬼　いんじゃないの？　監督官に言えば。
赤鬼　あ、いえ、
黒鬼　お前ひとりやめたところで他にいっぱいいるっしょ。
赤鬼　昨日も、一昨日も、休んだ、から。
黒鬼　あー、金ね。日給だしな。厳しいわなっ……しゃ、ヒット。

ワンダフル、とまた画面から声。

赤鬼　っ……！

また嘔吐しそうな赤鬼を見て、

黒鬼　緑川も、昨日やめた。
赤鬼　え。
黒鬼　耐えられませんって。
赤鬼　ああ……

赤鬼、ちらりと周りを見る。

赤鬼　白崎くんも、見かけませんね。
黒鬼　あいつは先週末でやめたっポイ。連絡ないみたいだからにゃあ。
赤鬼　ああ……
黒鬼　紺野は、なんだっけ、えーと、けんしょうえん？　になってしばらくお休み。
赤鬼　腱鞘炎？
黒鬼　コレ。

コントローラーを指し示す。

黒鬼　あいつ仕事の鬼だったから。あ、これ、監督官のモノ真似、ウケる。
赤鬼　紺野くんって売上成績一番だったですもんね。
黒鬼　逆に異常だよ。
赤鬼　え？
黒鬼　鬼気迫るって、ああいう感じだ……って、これも監督官の真似っコ、ウケる……

赤鬼、また吐きそうになる。

黒鬼　……帰ったら？
赤鬼　いや、

で、また吐きそうになる。
座ろうとして、吐きそうになり、
コントローラーを握りしめてまた吐きそうになり、
とにかく何かをするたび、吐きそうになる赤鬼。

黒鬼　お前、ホント、なにやってんの？　ここ来て吐きそうになるしかやってないっしょ。分かってここに働きに来てるんだしょー？　金もらってんだからちゃんと働きなサイ。ナサイ、だって、ウケる。

赤鬼、コントローラーを見た。

赤鬼　ちゃんと、働く……？

画面を見る。

赤鬼　働く。働く。働く。
黒鬼　ヤならやめれば？　他にいくらでもいるんだし。

赤鬼の周りには、同じようにコントローラーを操作する無数の人々。

黒鬼　まねー、他に仕事のアテがあるなら、俺だってやめるわ。ないからここまで来たんだ、って……

赤鬼、膝をついて嘔吐する。

黒鬼　あり。マジか。

チラリと周りを見て、

黒鬼　とりあえず座っとけって。監督官来たらドヤされるから。

のろりと椅子に座る赤鬼。

黒鬼　吐きそうでも金がいるならフリだけでもやっとけば。どうせあとで成績バレるけど、今日の日当はもらえるっしょ。

赤鬼、やっとの思いで座る。

黒鬼　あとな、チクられるから。

赤鬼、黒鬼を見た。

黒鬼　するかよ。俺はな。

赤鬼　……んの……

黒鬼　あ？

赤鬼　ほんの……ちょっと……前までは……

黒鬼　なに。

赤鬼　こんなこと、ありえなかった、のに、

黒鬼　基準なんてものはすぐに変わる……って、これ監督官の口癖で、だから、とりあえずコントローラー持っとけって。

黒鬼、コントローラーを赤鬼に突きつける。

なんとも情けない顔で黒鬼を見る。

黒鬼　グズグズしてんなよ。隣でそんなグズグズされてたらこっちまでグズグズになっちゃうだしょ。下がんだよ、テンションが。毎朝吐いて布団から這い出して来てんのは自分だけだと思ってるならお前ホントいつか誰かにチクられっぞ。

赤鬼、黒鬼の手からコントローラーを奪い取る。
しかし、まだボタンは押さない。
黒鬼、黙ってコントローラーを操作する。

ガガガガガガ
戦闘機が通り過ぎる。
ガガガガガガ

黒鬼　……アカギくんさぁ。

ガガガガガガ
赤鬼が顔を上げて黒鬼を見る。

黒鬼　アカギくん、なんでここまで来たの？

赤鬼　ここ、まで、って……？　電車、
黒鬼　前はナニしてたんですか？　ってこと。
赤鬼　ああ……役者を。
黒鬼　学者！？
赤鬼　あ、いや、役者。
黒鬼　え、なにそれ。
赤鬼　え、だから、えーと、は、俳優、ってやつで、
黒鬼　……ああ！
赤鬼　はい。
黒鬼　AV

赤鬼　違います。
黒鬼　違うの？　出てないの？
赤鬼　ないです。ない。映像じゃなくてその、舞台の、
黒鬼　は？
赤鬼　……舞台。
黒鬼　……部隊？　第七部隊、とかそういう、
赤鬼　あ、や、そのブタイじゃなくて、小学校の体育館にありますよね、こう、高くなってて、校長先生とかが喋る、
黒鬼　あー……そだっけ。俺、小学校、引っ越してばっかだったからあんまり記憶ないんだわ。
赤鬼　え、でも中学校でもありましたよね？　高校とか、
黒鬼　高校、行ってねから。
赤鬼　あ。
黒鬼　なに？
赤鬼　いえ。
黒鬼　珍しくもないっしょ。とっとと働きたくて、家も出られるし、金ないと暮らせないべ？　自分の保険証もらえるし。あ、で？　ナンだっけ、アカギくんの話、学者でAV男優してたって話。
赤鬼　なにひとつ合ってませんから。
黒鬼　あ、違った？
赤鬼　役者です。演じる人。物語の登場人物を、演じるんです。役者だけじゃなくて、書くほうも、
黒鬼　ああ！　ガラスの仮面だ。
赤鬼　ふるい……
黒鬼　嫁の姉ちゃんが好きでさ。ああ、あれねー、ああいうのねぇ。
赤鬼　や、あれとはまたちょっと違う、
黒鬼　あ、違うの？
赤鬼　いや、あれなんですけど、
黒鬼　じゃ宝塚だ。
赤鬼　だったらガラスの仮面のほうがまだ近い、え、近いかな？
黒鬼　もしかして劇団時季？
赤鬼　四季です。知らないって言いながら中途半端に知ってますね。

黒鬼　嫁の姉ちゃんが好きでさ。１年前から２・５次元ミュージカルってのにハマって借金作ってまで観に行って３次元にはもう興味がないって引きこもってとうとうポスター抱きしめて「この人と結婚する」って自殺未遂起こしたことがあって、

赤鬼　そんな観客ばっかりじゃないですから念のため。

黒鬼　儲かるんだしょ？

赤鬼　……は？

黒鬼　嫁の姉ちゃん、チケット代貸してくれってウチに来たとき１万円もぎ取って行ったから。あと宝塚のチケットは最低２０枚買って、みんなに教えたいから配るとか言って、また１０万くらいもぎ取って行ったこともあったかな。

赤鬼　……は？

黒鬼　儲かってんのになんでここまで来てんの？　えーと、役者？　って、こういうことしてなんかセリフとか言うんだろ、こう、

黒鬼、なんか手を大仰に広げてみるが、

黒鬼　……っなんも思いつかないや。

赤鬼　黒田さん、監督官！

黒鬼、赤鬼、さっとコントローラーを持って画面を見る、フリをする。

しばらく。

画面の中からの音だけが響く。
そっと視線を画面から外す。
赤鬼、小声で話し始める。

赤鬼　いや、あの、役者にもいろいろありまして……

黒鬼　うん。

赤鬼　僕はその、ホンも書いてて、

黒鬼　ホン？

赤鬼　あ、えーと、台本。シナリオのほうが分かりやすいかな。お話を、作るんです。
黒鬼　小説、的な？
赤鬼　あ、戯曲っていうんです。
黒鬼　へぇ……
赤鬼　はい。
黒鬼　分かんねぇけど。
赤鬼　自分でもやるんですけど、劇団だったら逆にチケットノルマってものがあったりして、舞台に出るためにこっちがお金を払って、
黒鬼　なにそれネズミ講？　マルチ？
赤鬼　違います違います。えーと、しゅ、修行……？
黒鬼　ああ……！　下積みね。俺も工場で一番難しいネジ回すのは下積みがいるって親方に言われたもん。なるほどね、修行時代ね。
赤鬼　テレビでもね、舞台出身の俳優さんって結構いてね、
黒鬼　へぇ大したもんだにゃ。で？
赤鬼　はい。
黒鬼　アカギくんはいつテレビに出んの？
赤鬼　あ、えと、僕はですね、テレビじゃなくて舞台の、
黒鬼　え、だって下積みしてんのはいつかテレビに出るためじゃないの？
赤鬼　出ないですよ。やー、よく言われるんですけど、みんなそう思いますよね、普通はね、でもホント、そうじゃないっていうか、別もんっていうか、やりたいのは舞台なんで、
黒鬼　え、なんかお前面倒くさそうだにゃ。
赤鬼　え、あ、あのですね、舞台とテレビは、違うってことなんですよ。
黒鬼　違うならワザワザテレビの話なんか出してくんなよ。めんどくせぇ。
赤鬼　あ、違うっていうか、その、まだ僕自身が、自分でも探してるっていうか、模索してるっていうか、足掻いてるっていうか、
黒鬼　え、なに、小難しいこと始まった？
赤鬼　や、難しいってわけじゃ、その、自分が、あの、あのね、何を表現するのかってことを、
黒鬼　わりぃ。何言ってっか全然分かんないにゃ。
赤鬼　あ、や、だから、僕が探しいてる表現はやっぱ舞台のほうにあるんじゃ

ないかって、まぁ、ぼんやりと、

黒鬼　とりあえずテレビには出ないってこと？

赤鬼　あ、ま、そうかな、そうです。

黒鬼　出ないんだ。

赤鬼　はい。

黒鬼　出ないの？

赤鬼　出ません。

黒鬼　ふぅん。

赤鬼　はい。

黒鬼　でも出てくれっつわれたら、

赤鬼　出ますね。

黒鬼　早いにゃ。

赤鬼　あ、でもでも、それが最終目的じゃないっていうか、

黒鬼　え、下積みは儲からないんだしょ、っていうか、マルチ？

赤鬼　だから詐欺じゃないですから。

黒鬼　じゃあ儲からないのになんでやってんの？

赤鬼　え。

黒鬼　アカギくんの最終目的って、なに？

赤鬼　それは、

黒鬼　ここで最悪のぶっ放す仕事しながら、アカギくんは最終どうなんの？

赤鬼、画面を見る。

黒鬼　つーか、ここに来るって、だいぶキテるね。俺に言われたかないだろうけど、

赤鬼　……いろいろ。

赤鬼　うまく、

赤鬼　いかなくて、

赤鬼　バイト、してたんですけど、

黒鬼　その年で？　いくつだっけ？

赤鬼　３２……

黒鬼　マジか。

赤鬼　大学、出てから、ずっと、バイトで、

黒鬼　大学行ってバイトって、お前ん家、余裕だな。

赤鬼　でも、やっぱり、ちゃんと、しようって、そろそろ、しなきゃって、

赤鬼、画面から目が離せない。

赤鬼　思ったのに、いつのまにか基準が変わって、

黒鬼　もう他の仕事にはありつけなかった、って？

赤鬼　金、なくて、

黒鬼　バイトっつっても１０年くらい働いてるのに？

赤鬼　なんとか、なるって、みんな言ってたし、いや、自分の計画性の無さのせいなんですけど、

黒鬼　なんとかなるって言うやつほど実は自分でなんとかしてるからなぁ。

赤鬼　人に、紹介してもらって、ここ……

ガガガガガガ

赤鬼、目が離せない。
ガガガガガガ
赤鬼、嗚咽した。

黒鬼　なんだ、ここも人任せか。

黒鬼は、赤鬼を見下ろす。

黒鬼　アカギくんさぁ、そんな繊細でどーすんべ？
赤鬼　せん……さい？
黒鬼　仕事だしょ？
赤鬼　……はぁ。
黒鬼　つか、ほぼゲームだし？
赤鬼　……はぁ。
黒鬼　画面でしかないだしょ？

赤鬼　目の前の画面を見た。
ガガガガガガ
弾丸の音がする。
戦闘機が飛ぶ。

赤鬼　……でも、本物、ですよね？

黒鬼のコントローラーさばきは見事で、
画面からしきりに、
グレイト、
ワンダフル、
アメージング、
と、褒め称える声がする。
機関銃の音とともに。

黒鬼　だにゃ。

赤鬼　飛び散る赤い血とか、肉の破片とか、

　グレイト。

赤鬼　画面の向こうの景色は、

　グレイト。

赤鬼　全部本物で、

　グレイト。

赤鬼　これを押せば、

　グレイト。

赤鬼　吹っ飛ぶわけで、

　グレイト。

赤鬼　指先で、動かすわけで、

　グレイト。

赤鬼　これは、全部、本物ですよね？　僕の指先が、

　ガガガガガガ。

赤鬼　吹っ飛ばしてる。これ、本当、ですよね？

　黒鬼、赤鬼は見た。

黒鬼　だってこれがいまのスタンダードだし？
赤鬼　スタン……
黒鬼　国際基準の戦争。もう常識だしょ。

グレイト。

赤鬼　こんなのが、
黒鬼　基準はいつでも変わる……って、さっき言ったっけ、監督官の口癖ね。
赤鬼　きじゅ……
黒鬼　考えりゃ分かるってねー、スマホの地図アプリが便利なのも、遠隔でサッサカ操作出来るのも、ドローンも生活レベルであんだけ高性能ってことは、最前線でさらに高性能なもんがあるからに決まってるって、あ、これも監督官の口癖ね。そのまんま丸覚えしたんだけど俺バカだから全然意味分かんなくて、
赤鬼　……
黒鬼　ウケる？
赤鬼　笑えません……
黒鬼　アカギくんさぁ、役者やってんだったら、これも演技すりゃいいんじゃない？
赤鬼　演技……
黒鬼　凄腕の、傭兵。画面の向こうをぶっ放す。っていう、物語。作り物。ホントじゃなくて。やり方あるんだったら教えろよ。
赤鬼　……自分を、騙せませんから。
黒鬼　あ？
赤鬼　演技でなんて騙せませんから。
黒鬼　それって向いてないってことじゃね？
赤鬼　違います。
黒鬼　あ？
赤鬼　自分を騙すのが、役者じゃありません。
黒鬼　あ。
赤鬼　なんですか？
黒鬼　いま、すんごい気持ち悪い感じが、こう、
赤鬼　はい？

黒鬼　なんていうの、こういうの、目につく？　耳につく？
赤鬼　鼻に付く？
黒鬼　それ。
赤鬼　え、なんで、
黒鬼　じゃ誰騙すの？　あ、観てるほう？
赤鬼　観客も誰も騙しません。
黒鬼　でもウソっこだしょ？　自分じゃないもんになったりすんだろ？
赤鬼　ある意味そうだけどそうじゃないし、
黒鬼　なんだよ、グズグズしてんな。
赤鬼　そこには想像っていうかイメージっていうか、
黒鬼　グダグダ言ってんなよ。作りもんに出来るならそのほうがいいだろ。
赤鬼　だからお芝居は作りもんじゃ意味がなくて、
黒鬼　作りもんだしょ。
赤鬼　いやその厳密に言えば、
黒鬼　なんだよ、お前、ただ演技出来ないだけじゃねぇの？
赤鬼　だから演技は嘘じゃなくて、
黒鬼　出来ないのかよ？　仕事している間はどっかに自分を置いておいて、仕事終わったらモトに戻れるような、そーゆーこと。
赤鬼　どっかになんて置けません。自分の体使ってやってるわけだから、
黒鬼　そうだよ、分けられるわけないんだよ。
赤鬼　どっちですか。
黒鬼　そうしたいのに出来るわきゃないってことだよ。今ここで考えて動いてるのは俺でしかないってことだっしょ！

思わず、立ち上がった黒鬼。
周りを気にしながら、ゆっくりと座る。
黙ったまま。

赤鬼　それ真髄……！
黒鬼　は？
赤鬼　黒田さん、役者やったことあるんですか！？
黒鬼　なんでだよ、仕事の話だろ。

赤鬼　あの、黒田さん、

赤鬼、椅子から立ち上がった。

黒鬼　なに？　やっぱやめるの？

赤鬼　……あ、でなくて、あの、

黒鬼　運良く次の仕事の面接に行けたら履歴書は正直に書かないほうがいい。

赤鬼　え？

黒鬼　俺、一回やめたことあっから。

赤鬼　黒田さんが？

黒鬼　ぜってー、どこも取ってくれないから。

赤鬼　え。

黒鬼　石投げられるね。近所にバレたらな。金もねぇのに引っ越しだよ。俺や嫁はいいけどな。子どもがさ、そんなさ、そんな思い、させたいわけじゃなかったのに。逃げられない。募集してるくせに、ネガティブキャンペーンも同時に流行らせているわけよ。だから。もう。逃げられない。ここに戻るしかない。他にないっしょ。うまく出来てやがるだろうって、これは情報通のロクさんの口癖。

赤鬼　ネガティブ？

黒鬼　例えば、

赤鬼　え？

黒鬼　例えば自分がちょうどいいくらいの家に住んでいて、嫁が、もうーシャワーの水出しっ放しにしながらシャンプーしないで水道代がもったいないでしょーくらいの節約するフツーの家で、子どもが小学校入る時には、俺の親か、嫁の親、どっちがランドセル用意するかで、うちが、いや、うちが、とか言ってるような。

赤鬼　は……

黒鬼　そういう想像。

赤鬼　は？

黒鬼　してみ？

赤鬼　え。

黒鬼　いいからしてみって。

赤鬼　し、ました。
黒鬼　んで、こっちはフツーに暮らしてんのに隣に引っ越してきた家の親父がさ、シューテングセンター勤務なんだよ。

赤鬼、コントローラーを見る。

黒鬼　噂があってさ。

黒鬼　シューテングセンターは国家規模の警備だってニュースで言ってるのに、どうやら実際は違うらしい、とか。

黒鬼　噂ではさ、シューティングセンターに行く人間はもと犯罪者だって噂。

黒鬼　また別の噂ではさ、シューティングセンターに働きに行くようなやつは最悪でゲームばっかしてマトモに働きたくないダメ人間がぶちこまれて、ゲームみたいにコントローラー使って敵国の兵士をぶっ放してるって噂。

黒鬼　また別の噂では、シューティングセンターに行く人間は精神鑑定の結果、生まれつき良心ってもんがナイ精神構造を持った人間だって噂。

黒鬼　お前がちょうどいいくらいの家のお父さんなら、自分の子どもや嫁にさ、気をつけろって言うっしょ？　ていうか、出来ることなら近づくなって言わない？　ゴミ置き場で毎日奥さまたちのネタになるっしょ？　なんでこんなゲンジツになっちゃったのかは知らんふりで噂するだけ。
赤鬼　黒田さん……
黒鬼　人間は噂しか信じないから簡単だってね。
赤鬼　黒田さん。
黒鬼　ヤなもんは見ないように出来るらしいね、なんかね、便利いい。
赤鬼　黒田さん。
黒鬼　だから今のこのゲンジツ、
赤鬼　それは誰の口癖？
黒鬼　あー……俺かな。

赤鬼　黒田さんって、物語を作るセンスもあるんじゃない……？
黒鬼　は！？
赤鬼　あるよ、うん、ある。
黒鬼　んだよ、センスって、
赤鬼　才能とか僕その言葉大嫌いで気持ち悪くて信用ならなくて、でも、センスって、絶対必要だと思っていて、
黒鬼　バカ、触るな、掴むな。離せって、
赤鬼　一番好きな小説って何ですか？
黒鬼　読んだことねぇわ。
赤鬼　じゃ、映画、
黒鬼　AV 以外興味ねー、だから掴むな。
赤鬼　音楽は、詩とか、
黒鬼　誰がそんな余裕な生活送ってっかよ、バカか、お前は、
赤鬼　じゃもともと備わった黒田さんのセンスですよ、さっきの語り口は。
黒鬼　どんな口だ。
赤鬼　皮肉と観察と物語性がっ、
黒鬼　あれはただの現実、あのな、現実の噂を言っただけで、

赤鬼、黒鬼の座る姿を客観的に眺めて、

赤鬼　ああ！？　結構絵になるしっ！
黒鬼　うぜぇべ！
赤鬼　今必要なのはそういうことなんじゃないかなって、
黒鬼　は？
赤鬼　テレビのニュースなんかもう全然意味なくてネットだって規制かかって、そしたらもう生身でやるしかない。だから、僕らはなにかしないと、
黒鬼　なんの話だっつー、
赤鬼　黒田さんみたいな人が必要なんだって、そうか、本当の現実の最前線を知っている人間が表現をしなきゃ、黒田さんがだよ、うん、しないと、うん、じゃなきゃ今のこの現状が変わらないから、僕がやりたいのは……黒田さん、アフターファイブに演劇しない？

黒鬼、赤鬼の手を、ゆっくりと離す。

黒鬼　アカギくんさ。
赤鬼　はい。
黒鬼　ここに何しに来たの？
赤鬼　え。
黒鬼　俺、働きに来てんだけど。
赤鬼　僕も、そう、です、だけど。
黒鬼　おしゃべりしに来てんじゃねーし、友だち探しに来てんでもねんだけど。
赤鬼　ああ……
黒鬼　ヒットポイント上げれば日給上がんだよね。分かる？
赤鬼　……その数はなんの数なのか分かってて言ってるんですか？
黒鬼　お前、社会見学しに来たのかよ。
赤鬼　え。
黒鬼　そんなに言うなら監督官にそれ言って来いよ。もっと偉いヤツに言って来いよ。ナンだよ、表現って。気持ち悪いなお前。ヒットポイントの数があんだって？
黒鬼　死体の数だろ。

赤鬼、口を抑えた。

黒鬼　だから。分かっててこの仕事やりに来てんだしょ？

赤鬼、呼吸を整える。

赤鬼　時間も、休みもある、イイ、仕事だからって……
黒鬼　イイ仕事だしょ。中央政府の管轄だもん。昔と同じ。やり方が変わっただけ、ってこれも監督官の口癖。
赤鬼　生身で前線に行くか……？
黒鬼　離れた場所からコントローラー操作するかの違い。知ってっか？　この仕事の第一次募集は殺到したらしいって。9時5時だし。ほとんど公務員なみ。

奈落の底で生活してる人間がそりゃ飛び つく ってな。見事に自分の体は傷 つかねぇもん。けど。

黒鬼、画面を見る。

赤鬼、また吐きそうになる。

黒鬼　もう人間の感覚はどっか行 っちゃ ってウケる。体は吐いてうなされるのに、目の前で肉が弾け飛んでも、もうなんも感じない。ボタンを押す。ヒットする。血が飛ぶ。誰か分かんない塊がホントのカタ マリになる。ボタンを押す。ヒットする。日銭をもらう。満員電車に乗 って帰る。夕暮れ。すげー夕暮れ。ちょっと前とナンもあんまり変わらない。コンビ ニでビール買うし、休みになったらカラオケ行くし、なんか会社員のおっさんが呑んだくれてるし、この仕事の第 一次募集が始まったときはあんなに反対運動していたナンチャラ団体も最近は名前も見ない。しょうがないか、この防衛をやめたらもう全部終わるし、でも異常なんだけどそれが毎日続くと へぇぇぇぇ、それがフツーになる。だって今もうフツーだしょ？　街はいつもフツー。つり革を両手で掴まないとさ、痴漢勘違い防止、これもフツー、常識。変わりない。けどフツー って書いてあるサランラップをぴ ったり巻いているみたいで、空気が、足りない、だから今度は人間がいっぱいのフツーの車内のほうで吐きそうになる。玄関に明かり。ああ。ただいま。ああ。やっと、そこで、涙が出る。

黒鬼　玄関に、靴が並んでやんの。嫁のと、ちっこいのと。ちょっともう古くなってる靴。

黒鬼　玄関の扉開けたまんま。しゃがみこんで。つい昨日までは、流れた。

黒鬼　のに、もう、出ない。

黒鬼　今は、出ない。

黒鬼　もう、出ない。

黒鬼　もう、枯れた。

黒鬼　もう。

黒鬼　もう、抱っこ出来ないわ。

黒鬼、コントローラーを操作し続ける。

黒鬼　この指ではもう。

黒鬼　抱っこしたくない。

赤鬼　あの……黒田さん……

黒鬼　ぶっ放してやりてぇなぁ。

赤鬼　え？

黒鬼　なんも知らねぇのにいろいろ言うやつらを。マジの仕方がないってことを知らねぇやつらを。マジで仕方がないのをうまいこと使うやつらを。組み立てとかの工場の仕事はもう機械が入ってるし、ていうかバッサバッサ人間の仕事斬り捨てられて、こっちは逆に人間じゃなきゃ細かい判断は出来ないんだと。皮肉だしょ。

グレイト。

黒鬼　子どもの頃に熱が出たら病院に行くのが普通だって家ばっかじゃないって、知らねぇやつらが多いよな。お前もそうだろ。なんだかんだ言っても余裕だろ？　だからさ、自分の子どもには余裕をやりたいから動かすんだよ、指を。

ワンダフル。

黒鬼　でも分かってんだ。
赤鬼　え……
黒鬼　俺バカだけどわかってんだ。本当は、もしかしたら、もっと、別の、なにか、やり方が、あったかもって、でもそれ考えられなくて、だからこれ、抱っこもしてやれないようなことだって、わかってる。

黒田、少し笑った。

黒鬼　だって俺今飛んでったあの光が花火みたいだなぁって眺めてる。

アメージング。

黒鬼　これが人間のやることかにゃ。

アメージングアメージングアメージング。

黒鬼　そこに俺もいるんだろうけど。

赤鬼、ただ黒鬼を見る。

黒鬼　何が見える？
赤鬼　え。
黒鬼　画面だよ。
赤鬼　……知らない国が見えます。
黒鬼　でも俺はさ、これを、俺が乗るあの満員電車が走る町だって想像すんだ。
赤鬼　え？
黒鬼　それを、ぶっ放してる。自分が住んでいる場所を、ぶっ壊してるのと同じ、そんな想像、してんだ。

赤鬼、画面を見つめる。

黒鬼　本当は、お前のほうが、これは画面の向こうだって思ってんじゃねぇの？

赤鬼　え。
黒鬼　関係ないって、思ってんじゃねぇの？
黒鬼、画面を見る。
黒鬼　だからそんなにヌルい顔してられんだよ。
何かの警戒を知らせる音がなる。
赤鬼　黒田さん。
甲高い音。機械的な一定音。
赤鬼　黒田さん。
赤鬼はその音の意味が分からない。
黒鬼は画面を見ている。
黒鬼　あ。
警戒の音がプツリと途切れる。
黒鬼　あっけねぇ。終結しちまった。
赤鬼　え？
黒鬼　終わりだって。
赤鬼　おわっ……た、って……だってさっきまで、え？
黒鬼　また基準が変わったんじゃね……
赤鬼、画面を見る。

4、暗闇の間

と、同時に全てが真っ暗闇、

に、声。

赤鬼　ココロ　ノ　ヤサシイ　オニ　ノ　ウチデス

赤鬼　ドナタデモ　オイデクダサイ

赤鬼　オイシイ　オカシ　ガ　ゴザイマス

赤鬼　オチャ　モ　ワカシテ　ゴザイマス

5、公園

音がする。
ジャッ……と、水の音。
公園の街灯。
ひとつだけポツンと灯り。

小さなダンボールの小屋。

まるで看板のように、

『泣いたら赤鬼、陽はまた昇り』

と書いてある。

バケツに水。
タオルを浸して絞る音。
赤鬼が、顔を拭く。

赤鬼　……っい。

額に怪我。

赤鬼　いたた……

そっと撫でる。
シャツを脱いで、身体も拭く。

浮浪者のようにも、見える。

夏の虫が鳴いた。

赤鬼はノートを開く。
ちびた鉛筆で、
書き記す。

赤鬼　月。いつからそこにいる。
月。いつまでそこにいる。
月。どこまで見透かしている。
月……

赤鬼、夜空を見上げた。

赤鬼　明日は、誰か、うん、誰かは、来てくれる……だろう……

赤鬼　ひとりくらいは。

赤鬼　そこは、多くの人たちが、集まっていました。

赤鬼　いろんな理由の、人たちが。

赤鬼　ぼくたちは、

赤鬼　鬼では、ない。

赤鬼　ぼくたちは、

赤鬼　毎日、吐き気をおさえながら、画面を見つづけた。

赤鬼　しかたがなかった、とは、言いません。

赤鬼　ぼくたちは、いろんなものを、見た。

赤鬼　ぼくたちは、たしかに、たくさんの……

赤鬼　それでもぼくたちは、

赤鬼　鬼ではない。

赤鬼　向かい合えば、それが、分かります。

赤鬼　どなたでも　おいでください。

赤鬼　お題は観てのおかえり。

ガンガン、とバケツを太鼓代わりに叩く。

赤鬼　ほんの少し前にあったホントのこと……

ガンガン。

赤鬼　月。

赤鬼、小さく歌った。

うえをむいてあるこう
なみだがこぼれないように
おもいだすなつのひ
ひとりぼっちのよる

赤鬼、自分の指先を見た。

吐き気がする。
バケツに顔を突っ込む。

足音がして、バケツから顔をあげる。

パリッとしたスーツを来た男がいた。

赤鬼　あの……

青鬼　……お察しします。

赤鬼　え……？

青鬼　ですが、すいません。

赤鬼　あ、はぁ……

青鬼　町内会で話し合いまして、その、町内会代表として、

赤鬼　はい。

青鬼　……子どもが、怖がりますので。

赤鬼　え？

青鬼　場所を、その、寝る場所を、変えていただけませんか……

赤鬼　……え。

赤鬼、立ち上がると、

青鬼、一瞬にして赤鬼から距離を取る。

青鬼　すいません。

それがあまりにも赤鬼を恐れた態度であったので、

赤鬼　僕、なにかしましたか。

青鬼　先日、石を投げたのは僕の息子です。すみません。子どもだから、軽い気持ちで、すいません。でもお願いします。ただ怖いというだけで警察には届けられませんし、いえ、届け出るようなことは何もしていらっしゃらないのも分かっています、ですが、怖がります。みんな怖がりますのでどうか、

赤鬼　なにもしません。

青鬼　分かってます。石をぶつけられても、じっとされていましたし、分かっています、ここの誰もみんな分かっているんです、けど、

赤鬼　けど、

青鬼　……けど。

赤鬼　あのう、僕、なにか、しないと……と、思いまして。

青鬼、顔を上げて赤鬼を見る。

赤鬼　なにが、出来るのかと、考えまして。

赤鬼　あの仕事を経験した僕らにとってもいいことで、経験しなかった人たちにも、いいことは、なにがあるんだろうって。

赤鬼　昔、役者、やってまして……

青鬼、赤鬼をじっと見る。

赤鬼　仕方がなかったから、とか、そういうことを、言いたいんでは、なくて、その、基準が、いつでもすぐに変わるから、その、こんなこともあったんだって、すぐに、忘れられていくから、その、

青鬼　忘れたほうがいいこともあります。

赤鬼　でも、忘れると、すぐに、人は、すぐに、繰り返すから、

青鬼　もうあんなことは起こらないでしょう。

赤鬼　でも基準はすぐに変わります。

青鬼　あの時は世界が、全部が、おかしかったから、

赤鬼　またおかしくならないと、言い切れますか。

青鬼　そんなこと考えて暮らしていけませんから。

赤鬼　あの、見えますか、月。昇りますよね、そしてまた沈みます。でもまた昇ります。自然です。自然だから繰り返しますよね。人も、そうなんじゃないかって、だったら、もう、隠すのはやめて、伝えて行こうって、こういうことがあったって、それが僕の表現なんじゃないかって、

青鬼　表現……

赤鬼　考えてなくて、振り返ればいつも、計画性もなくて、センスもなくて、こんななっちゃって、でも、なにかは出来る、

青鬼、じっと見る。

やがて、

青鬼　……最終……目的……

赤鬼　え？

青鬼　あ、いや、

赤鬼　え……

赤鬼、青鬼を見た。

赤鬼　あ……？

青鬼、うつむく。

赤鬼　黒田、さん……？

青鬼　……いえ。

赤鬼　黒田さんですよね？

青鬼　いえ。

赤鬼　ほら、僕です。

青鬼　どなたですか。

赤鬼　アカギです。シューテングセンターで一緒だった、

青鬼　青山です。

赤鬼　え……

青鬼　僕は、青山と申します。人違いでしょう。

赤鬼　でも、

青鬼　僕はそんなところに勤務したことは一度もありませんよ。

赤鬼　あ……

青鬼　たくさんの方が働いていましたから、似ている人のひとりやふたりはいるでしょうが……人違い、人違いですよ。

しばらく、うつむく。

夏の虫が鳴いた。

赤鬼　あ……

赤鬼、何かを察して、

赤鬼　ああ……はい……青山さん、ですか。

青鬼　はい……

赤鬼　あ、や、あの、あそこに誰が働いていた、とか、そういう、個人名とかは、絶対に言いません。そんなことを言いたいわけじゃなくて、

赤鬼、指を見る。

赤鬼　鬼気迫るくらいに打ちまくった人もいました。

赤鬼　何も出来なくてただ吐いているだけの人もいました。

赤鬼　……もう、一番、自分の大事なものを、抱っこしたくないと、言った人もいました。

赤鬼　それらが、なかったことになると、また。

赤鬼　ほんの少し前なのに。

赤鬼　幻のようです。

赤鬼　物語のようです。

赤鬼　でもまたやってくる未来のようにも思えます。だから……そんな、お芝居を、するだけです。お題は観てのおかえり。

赤鬼　画面の向こうにな ったきりにならないようにと、

赤鬼　僕はすぐにヌルくなるんで。

赤鬼　考えたいだけです。

赤鬼　青山さん。

赤鬼、頭を下げた。

赤鬼　町内の人たちに、申し訳ありませんでしたとお伝えください。明日にはもういなくなりますので。

青鬼　別の……

赤鬼　え。

青鬼　別の場所でも、同じようなことをする つもりですか。

赤鬼　……ああ……はい。

青鬼　やめた方がいいです。

赤鬼　え。

青鬼　やめてほしい人たちがいるから。

赤鬼　あ……

青鬼、赤鬼に背を向けた。

赤鬼は小さなダンボールの家を片付け始める。

青鬼、数歩歩いて立ち止まる。

月を見上げた。

青鬼　石投げられるね。近所にバレたらな。金もねぇのに引っ越しだよ。

つぶやいた。

赤鬼　え？

赤鬼、振り返る。

青鬼　フツー。常識。変わりない。けどフツーって書いてあるサランラップをぴったり巻いているみたいで、空気が、足りない、だから今度は人間がいっぱいのフツーの車内のほうで吐きそうになる。玄関に明かり。ああ。ただいま。ああ。やっと、そこで、涙が出る。本当は、もしかしたら、もっと、別の、なにか、やり方が、あったかもって、でもそれ考えられなくて、

赤鬼　……黒田さん？

青鬼、振り向かずに歩き出す。

赤鬼　黒田さん！

赤鬼　黒田さん！　今は……

赤鬼　今は、抱っこしてあげられていますか、黒田さん！

答えはない。
夏の虫が鳴いているだけ。
うるさいほどに。

6、手紙

青鬼　で？

ネクタイを外しながら。
青鬼はスーツから稽古着に着替える。

赤鬼　うん。
青鬼　西藤くん。
赤鬼　うん。
青鬼　うん、じゃないよ。そっちが止まったんだろ。
赤鬼　お前はさ、どう思う？
青鬼　なにが？
赤鬼　お前は　泣いた赤鬼」はなんのお話だと思う？
青鬼　は？
赤鬼　これ、ネットで検索するといろいろ出てきて、赤鬼が勝手だとか、青鬼の自己犠牲とか、友情とか、なんかいろいろ解釈ってやつが、
青鬼　検索しなきゃいいよ。
赤鬼　え。
青鬼　そこに西藤くんが探しているもんはないから。
赤鬼　お前、やっぱ天才だな。
青鬼　で？　続き納得してないから止まった？
赤鬼　ってわけじゃないけ、

携帯が鳴った。

赤鬼　あはいはい。

くるりと青鬼に背を向けて。
別にその仕草は意図的ではなく、自然に。

赤鬼　あー、はいはい、どうも、え？　ああ、面白い企画っすね、いつですか

それ。はいはい、

舞台のどこかから自分のカバンを取り出して、

赤鬼　えーと、あ、あー……

スケジュール張を確認する。

赤鬼　それ3日間くらい後ろにズラしてもらえたり出来ますか？

青鬼は、パラリと台本を見ている。

赤鬼　あ、出来ない。そっか。いや、うちの芝居があって、すいません。これ絶対に動かせないんで、はい、また何かあったらよろしくお願いします。はい、よろしくどーぞー。

電話は切れて、少しだけスケジュール張に何かを書き込む赤鬼。
青鬼はそれを見てる。

赤鬼　ごめんごめん。続きだけど、
青鬼　西藤くん。
赤鬼　お？
青鬼　もう止めない？
赤鬼　あ、今日はもう終わる？
青鬼　全部。
赤鬼　……え？
青鬼　泣いた赤鬼」じゃないけどさ、たぶん、西藤くんの探しているものは、ここにはないよ。
赤鬼　え、なに、なんの話？
青鬼　解釈って、そういうのは難しいからよく分からないけど、たぶん、俺がね、俺的に思うのは、赤鬼は別のステージに行きたかったんだと思う。
赤鬼　え？

青鬼　こう、広げていく。
赤鬼　は？
青鬼　世界を。自分が生きている場所を、ぐんって広げて、だいたい怖くて踏み出せない。でも誰かがやんないと、その、鬼一族の中でさ。
赤鬼　え、分かんね。
青鬼　西藤くんはやっぱり赤鬼なんだよ。
赤鬼　マジ全然意味分からないわ。
青鬼　俺は、西藤くんと同じペースで出来ないから。
赤鬼　……え？
青鬼　西藤くんは、もっと自由になっていいよ。もっといろんなところに行って、もっといろんな人と、お芝居やっていいんだよ。それが西藤くんの可能性ってやつをぐんって広げるんだと思う。俺に合わせなくていい。
赤鬼　お前いきなりナニ頭いいこと言ってんの！？
青鬼　ひょーげんだよ、西藤くんの、表現。
赤鬼　え、ちょっと、え？　なんかさっきの電話、気にしてんのか？　あれ、お前の仕事の合間に合わせて、
青鬼　鈍いなぁ……
赤鬼　え。
青鬼　なんで分かろうとしないかなぁ。
赤鬼　え。
青鬼　俺に合わせるなって言ってるだろ。
赤鬼　でも、
青鬼　同じペースと感覚じゃもう出来ないって言ってんだよ。
赤鬼　え……？
青鬼　合わせられるほうの身にもなれよ。お前が俺のこと待つから、なんかあっても絶対待つから、もう止めるって、言えなくなる。俺なんかに合わせて窮屈な顔してんなよ。
青鬼　正直、疲れる。お前のところまで行けなくて、疲れた。
赤鬼　いや。

赤鬼　いやいやいや。

赤鬼　それ卑怯だわ。

赤鬼　だったら初めっからそう言えって。なんか俺の為っぽい言い方だけどお前がもう嫌になったってだけだし、俺のところまで行けないって、いつだって元晴のほうが天才だろうが、でも、ああ、もう、終わりって、ことだし、もう、いい……いいわ。

赤鬼、小道具を抱えて去る。

少しだけ乱暴に去る。

青鬼、じっと黙っているだけ。

やがて、

青鬼、ごそりと台本を広げた。

青鬼　次の日。

青鬼　黒田であった青山は、町内の家を、一軒、一軒回った。

青鬼　アカギのことを話して回った。

青鬼　指先を握りしめながら。

青鬼　アカギの思いを、話して回った。

青鬼　自分の過去さえも。

青鬼　それらが、なかったことになると、また。

青鬼　ほんの少し前なのに。

青鬼　幻のようです。

青鬼　物語のようです。

青鬼　でもまたやってくる未来のようにも思えます。

青鬼　指先を握りしめながら。

青鬼　ひとり。また、ひとり。

青鬼　アカギの小屋へ、人が集まり始めます。

青鬼　お題は観てのおかえり。

青鬼　黒田であった青山もまた、未来を考えた。

青鬼　ひとり。またひとり。アカギのダンボールの小屋に、

青鬼　人が集まる。

青鬼　その中に、黒田であった青山の姿は、ない。

青鬼、振り返る。

そこに、赤鬼がいる。

小さなダンボールの小屋。

青鬼、台本を一枚破る。

破って、紙飛行機を作る。

ふわりと、風に乗って。

赤鬼の足元にポトリ。

赤鬼、拾ってそれを広げて見る。

赤鬼　アカギくん。

赤鬼　未来が見えるだしょ。

赤鬼　町内会の人たちは眉をしかめる人もいれば、頷く人もいる。怖がる人もいて、怖がらない人もいる。人が、その人そのものひとりであれば、どこまでも自由に思うだけだ。だから観に来てくれる人もいるでしょう。それでいい。人が、その人そのものから膨れ上がって集まって集団になって組織になったら自由とは違う規律が生まる。会社は、町内会とは少し違いました。僕はまた仕事を求めて別の土地へと出発します。これこそ、仕方のないことです。ただ、僕はそこでは名前を変えないでしょう。息子にも、きっとそれを伝えるでしょう。僕の指を見せるでしょう。アカギくん。君とは友だちでもなんでもない。ただ隣で働いていただけだ。けれど君は、僕にひとつの表現を見せてくれた。もう、自分が住む街をぶっ放すような想像を、僕は二度としないでしょう。

赤鬼　アカギくん。

赤鬼　あの世界をともにした僕らにも、

赤鬼　未来が見えるだしょ？

赤鬼は、青鬼からの手紙を読んで泣いた。

そんな赤鬼を、青鬼はじっと見てる。

ひとしきり泣いた赤鬼が、顔を上げた。

赤鬼　元晴。俺はやっぱりお前と芝居がしたい。ただ、それだけ。

青鬼、赤鬼を見た。

青鬼　それが、西藤くんの、表現？

赤鬼、手紙を見ていた視線を上げる。

赤鬼　赤鬼が、青鬼とずっと一緒にいる世界があったっていいだろう？

青鬼、笑った。

おしまい